

Health Care Economics

大学院特別講義

(医歯学先端研究特論) (生命理工学先端研究特論)
(医歯理工学先端研究特論)

下記により大学院特別講義を行いますので多数ご来聴下さい。

記

**演題： 幼児期の生活環境、出生時の体重等が、
子供の発達に与える影響の分析**

**演者： 日本大学 経済学部 教授
乾 友彦 先生**

日時： 平成25年5月24日（金）18：00－20：00

場所： 医療経済学分野研究室4（M&Dタワー6階）

内容：テレビやゲームをすることは、子どもの健全な発達に悪影響を及ぼすのだろうか。厚生労働省が2001年から収集している「21世紀出生児縦断調査」の個票データを用い、テレビやゲームが、就学期の子どもの問題行動・学校環境への不適応・肥満などの発達を示す指標にどのような影響を与えているかという因果関係を分析する。実証分析の結果、テレビやゲームをする時間が長い子どもほど発達に悪影響があるものの、その影響度は極めて小さいことが明らかになった。しかし、一日に4－5時間もテレビやゲームをするなど過剰な行動は、負の影響を飛躍的に大きくすることもわかっており、適切な管理が必要であることもうかがわれる。こうした一連の結果は、双子や三つ子のデータを用いて、遺伝的な要因を制御してもなお、頑健であることが示されている。

海外では、胎児期の栄養状態をあらわす出生時体重が重いほうが、成人してからの学歴や賃金が高いという実証研究が多く見られており、妊娠中の母体の健康管理の重要性を指摘する声が高まっている。日本のデータを用いて、出生時体重がその後の人生に与える影響を実証的に明らかにすることを研究する。インターネット調査を経由して収集した一卵性双生児のデータを用いて行った実証分析によると、出生時体重の差は、私立中学へ行く確率や中学校における成績を左右する要因ではあるものの、最終学歴や賃金にまで影響していないことが明らかになった。しかし、私立中学へ行く確率や中学校における成績は、最終学歴や賃金に影響するため、出生時体重が学齢期の教育成果に影響することを通じて、学歴や賃金に影響する可能性は否定できない。

【担当講座】医療経済学分野 五十嵐 公

【連絡先】宇野 聡（内線 5931）uno.hce@tmd.ac.jp